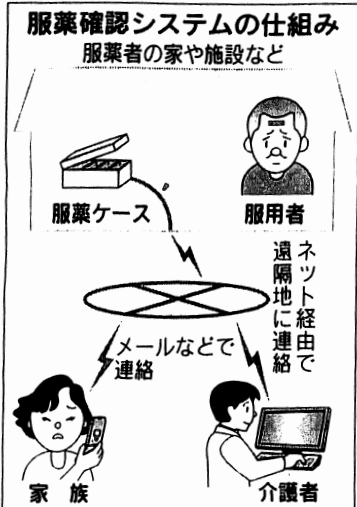


薬の飲み間違い防ぐ

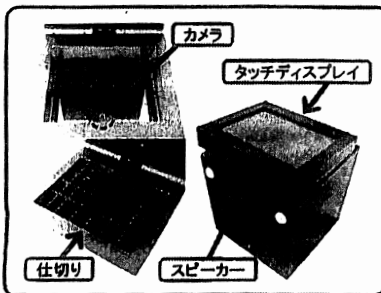
筑波大学の中内靖准教授らの研究グループは、高齢者の薬の飲み間違いを防ぐシステムを開発した。独り暮らしの高齢者に服用するタイミングや薬の種類、量などを音声で知らせるほか、遠隔地から家族や医師、介護者が確認、指示できるのが特徴。東京都内の企業と手を組み、実証実験を繰り返したうえで1年以内の実用化を目指す。

高齢者向け 筑波大がシステム

システムはタッチパネル式の表示装置、カメラ、薬を入れるケースなどが一体になっており、電話線などにつないで利用する。介護者や家族は処方された薬をあらかじめケースの決められたスペースに入れ、併せて服薬のタイミング、回数といった情報を設定する。朝昼夜など薬を飲む時



時間、種類、量など音声案内 家族らにメール連絡も



中内准教授らが開発した服薬ケース。ネット経由で遠隔地から情報を確認できる。刻が来ると音声で服薬の注意が流れ、ケース上部の画面に薬の種類、量などを表示する。高齢者は画面を見て種類と量を確認し、服薬する。ケースに設置したカメラが薬の量や種類を常時確認するため、誤った薬を選んだり、薬を飲み忘れたりすると警告が鳴り

注意を促す。異常を素早く把握できるように、警告を発した際は同時に遠隔地にいる介護者や家族にも電子メールを送信する。冷蔵庫に開閉センサー、ベッドから起きあがる動作を計測する圧力センサーなどと組み合わせることで食前、食後、寝起きといった生活の状況も把握できる。試作した薬ケースは約20万円前後だが、センサーなど使用部品の変更に価格を数万円程度まで引き下げることを検討している。まず福祉施設や介護施設といった事業者にシステム導入を呼び掛け、どの家庭でも使用できる常備設備に育てたい考え。近年、独り暮らしの高齢者世帯や介護施設などで薬を飲み忘れたり服薬量を間違える事故が多発しているという報告が自治体などに増えている。市販している従来の服薬確認ケースも服薬時刻を

ランプで知らせる程度で、高齢者の判断に任せられないという。ランブで知らせる程度で、高齢者の判断に任せられないという。